

https://farid.ps/articles/remembering_aaron_bushnell/ja.html

「これが我々の支配階級が普通だと決めたことだ」：アーロン・ブシュネルを追悼する

2024年2月25日、25歳のアメリカ空軍兵士 **アーロン・ブシュネル** は、ワシントンD.C.にあるイスラエル大使館の門に向かって静かに歩み寄った。軍服を着て、彼はライブ配信に静かに語りかけた：

「私はアメリカ合衆国空軍の現役兵士であり、もうジェノサイドに加担しません。私は今、極端な抗議行為を行おうとしていますが、パレスチナの人々が植民地主義者の手によって経験していることに比べれば、これはまったく極端ではありません。これが我々の支配階級が普通だと決めたことです。」

数瞬後、彼は自分に火を放った。炎が彼を包む中、彼は何度も叫んだ：「Free Palestine!」

アーロン・ブシュネルは数時間後に亡くなった。彼の肉体は滅びたが、その言葉は良心、共犯、そして道徳的沈黙の代償についての世界的な対話を灯した。

良心のための殉教者

アーロン・ブシュネルを殉教者と呼ぶことは、彼がもはや否定できなくなった真実のために死んだことを認めることだ。彼の行為は絶望から生まれたものではなく、信念から——彼の周囲に見た道徳的偽善の中で生きることを根本的に拒否したものだった。

ブシュネルは権力の仕組みを理解していた。徴兵された兵士として、彼は服従と官僚主義が遠くの戦争を維持し、市民の苦しみが統計に還元され、システムが「国家安全保障」や「付随的損害」といった言葉で残虐行為を浄化するのを目の当たりにしていた。

しかし彼の反抗は公的なものだけではなかった。それは心を抉るほど個人的でもあった。死の前に、彼は生涯の貯金をパレスチナ子供救済基金に寄付した。この団体は戦争の若い犠牲者に医療と支援を提供している。彼はまた近所の人が愛猫の世話ををするよう手配した。最終的な抗議行為においても、慈悲がすべての決定を導いたことを保証した。

こうした仕草は、彼の抗議が生命の拒絶ではなく、その擁護だったことを明らかにする。

死の数日前、彼はオンラインに投稿した：

「我々の多くは自問するのが好きだ。『奴隸制度の時代に生きていたら何をしたか？ ジム・クロウの南部で？ アパルトヘイト下で？ 私の国がジェノサイドを犯していたら何をしたか？』 答えは、あなたは今やっている。まさに今だ。」

この宣言は告白でもあり挑戦でもあった——現代の残虐行為を容認しながら道徳的後知恵を誇る社会に突きつけた鏡だった。

考えられないことの正常化

ブシュネルの凍るような警告——「これが我々の支配階級が普通だと決めたことだ」——は誇張ではなかった。それは診断だった。彼はガザの地区全体の破壊、市民の飢餓、子供の殺害が政策と防衛の言葉で正当化される世界を見ていた。

彼にとって恐怖は暴力そのものではなく、**その暴力がいかに簡単に言い訳されたか**だった。政府が人権を罰せられることなく侵害し、公衆がそれを地政学の背景雑音として受け入れると、残虐行為は確かに普通になる。

ブシュネルの行為は新しい普通を受け入れることの拒絶だった。彼の炎は宣言した：「いいえ、これは普通ではありえない。」

国際法の碎けた権威

ブシュネルの抗議の核心にはガザへの共感だけでなく、人類の未来への恐怖があった。**国際法の規範**——集団的懲罰、市民の標的化、飢餓を戦争の武器とする——が結果なしに破られた瞬間、前例は世界的な崩壊を招く。

彼は一つの紛争における説明責任の侵食がその後のすべての国を脅かすことを理解していたようだった。法が選択的になり、正義が条件付きになると、道徳そのものが交渉可能になる。彼の死は道徳的叫びであり預言的警告だった：権力が恥じることなく殺せるなら世界は持続できない。

良心の反響：道徳的警告の系譜

ブシュネルの言葉は**悪は憎悪ではなく無関心に繁栄すると**主張してきた持続的な思想家の伝統に属する。彼の省察は時代を超えて響く——AINシュタインのヒューマニズム、バークの政治的現実主義、エリー・ウィーゼルの道徳的証言——それぞれが自らの時代における共犯の問いと向き合った。

ブシュネルが書いたとき：

「我々の多くは自問するのが好きだ。『奴隸制度の時代に生きていたら何をしたか？ジム・クロウの南部で？アパルトヘイト下で？私の国がジェノサイドを犯していたら何をしたか？』答えは、あなたは今やっている。まさに今だ。」

彼はその系譜に加わった——歴史の道徳的後知恵を現在形の告発に変えた。

AINシュタイン：見るだけの代償

アルベルト・AINシュタインにしばしば帰せられる引用（未確認だが）はブシュネルの意味を捉える：

「世界を破壊するのは悪を行う者ではなく、それを見ながら何もしない者だ。」

両者とも悪は滅多に自らを告げないことを認識していた。それは諦めと服従を通じて日常に染み込む。ブシュネルは傍観者になることを拒んだ。彼の行為は受動性の最終的な否定——沈黙そのものが権力者の手にある武器であるという宣言だった。

バーク：「善人」の致命的受動性

エドマンド・バークの有名な警告は今も響く：

「悪の勝利に必要な唯一のことは、善人が何もしないことだ。」

ブシュネルのメッセージはこの考えに新たな緊急性を与える。彼の時代の「善人」は悪党ではなく、市民、専門家、兵士で、静かに破壊システムを支えていた。「あなたは今やっている。まさに今だ」と言うことで、ブシュネルは共犯が中立的だという心地よい幻想を打ち碎いた。それはそうではない。不作為を通じた害への積極的参加だ。

ヴィーゼル：共感の死

そしてエリー・ヴィーゼルの1986年ノーベル講演の不気味な言葉：

「愛の反対は憎悪ではなく、無関心だ。」

ヴィーゼルにとって無関心はアウシュヴィッツの存在を許した。ブシュネルにとって無関心はガザを燃やす。両者とも最大の危険は怒りではなく、残虐行為が展開するのを世界が画面越しに見つめる中、道徳的麻痺だと見た。

ブシュネルの声は彼らに加わる——理論ではなく炎の中で。

炎を通じた証言

歴史を通じて自焼は最も極端な証言の形だった——サイゴンでのティク・クアン・ドゥクの静かな抗議から、自由のために自らを焼いたチベット僧まで。どの行為も道徳的叫びを苦しみの普遍的言語に翻訳する。

アーロン・ブシュネルはその急進的証言の系譜に加わった。彼の炎は怒りの象徴だけでなく、権力者の麻痺した良心を目覚めさせる試みだった。彼は他人を破壊しようとしたのではなく、我々の名で生命そのものが破壊されていることを思い出させようとしただけだ。

彼は復讐ではなく解放について語った——絶望ではなく連帯について。

彼が残す重荷

アーロン・ブシュネルを記憶することは重い責任を負うことだ。彼の人生は我々が住むシステムにおける我々自身の共犯と向き合うことを要求する。墓の向こうから彼が問う——我々のうち何人が「普通」として受け入れ続けるべきものを恐怖すべきか？

彼はマニフェストも組織も残さなかった——ただ残虐行為を普通化することを拒んだ一人の人間の例だけ。彼は猫の安全を確保し、貯金を戦場に閉じ込められた子供たちに与え、生きている疑問符として歴史に歩み入った：あなたならどうする？

彼の警告、「これが我々の支配階級が普通だと決めたことだ」はエリートへの非難だけではない。それは我々全員への鏡だ。上から普通化されたものは下で受け入れられるからこそ生き延びる。

終章：消えることを拒む炎

アーロン・ブシュネルの最後の行為は終わりではなく開き——集団的否定の布に裂け目。彼の死は良心がまだ存在することを思い出させる。帝国の機械の下に埋もれていても。

彼は服従より人類を選んだ兵士だった。彼は猫の安全さえ確保しながら自ら炎に歩み入った男だった。彼はジェノサイドが決して「普通」になり得ないと受け入れることを拒んだ市民だった。

「これが我々の支配階級が普通だと決めたことだ。」

これらの言葉をすべての政府ホール、すべてのニュースルーム、すべての静かな家庭に響かせよ。それは彼の警告だけではない——我々の審判だ。

アーロン・ブシュネルを記憶することは彼の抗議が無駄だったかのように生きることを拒むことだ。彼の炎は我々に目覚め、行動し、非人間性を普通化することを終わらせるよう呼びかける。すべてを焼き尽くす前に。